

誌上ギャラリートーク

展覧会のみどころ!

北原照久コレクション 現代アートと時代を映すおもちゃ展

2014年4月11日[金]～5月18日[日]

ブリキのおもちゃの世界的コレクターで、鑑定士としても知られる北原照久さん。実は、おもちゃだけでなく現代アートの作品も収集されている事、ご存知でしたか？北原さんを収集へと駆り立てるものの条件とは。作り手の情熱が表れ、手に入れることによって心ときめく、作品の力に溢れていること。そんな魅力的なコレクションの数々をご覧いただける展覧会が開催されます。



荒木博志《ASTRO BOY》1997年



北原照久氏

やさしく穏やかな中にも強い意志をたたえた表情で横たわるロボット。造形作家・荒木博志さんの《ASTRO BOY》、1mを超える等身大サイズの鉄腕アトムです。皮膚は防弾チョッキに使用されているケブラーという高強度・高耐熱性のある樹脂でできており、素材からもアトムの強さを感じることができます。荒木さんがこの作品を作る事を決めたのは昭和から平成になった直後の事。手塚治虫氏が亡くなった事で荒木さんの中の「昭和が終わった」という気持ちが強く、追悼の意味をこめて制作されました。

その他、与勇輝さんの木綿人形《ルージュの叔父さん・叔母さん》や香川在住の「絵描鬼(えかき)」柳生忠平さんの妖怪絵、もちろん懐かしいブリキのおもちゃも多数展示されます。美術館が大きなおもちゃ箱に变身です！

[十河裕実]

高松コンテンポラリーアート・アニュアルvol.04 リアルをめぐって

2014年5月27日[火]～6月22日[日]

アートの新しい動向を紹介する「高松コンテンポラリーアート・アニュアル」。5回目の開催となる今回のテーマは「リアル＝現実」です。しかし、展示室で皆さんにご覧いただく「現実」はただの現実ではありません。いわば「現実」とでもいうべき、なにがしかの「注釈」がつけられた現実です。参加アーティストは石黒浩(アンドロイド)、大西伸明(立体)小沢裕子(映像)、橋爪彩(絵画)の4人。ここでは石黒と小沢の作品を紹介し、「現実」の世界を少しご案内しましょう。

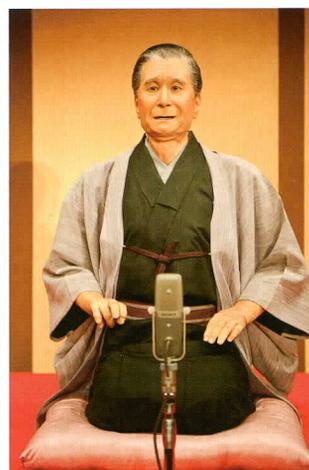
石黒浩はテレビその他でも紹介されることの多い、人間そっくりのアンドロイドの開発者。今回出品されるのは、2012年に落語家・桂米朝の米寿記念として製作された《米朝アンドロイド》です。表情のみならず息をする際の微細な動き、肌の質感など、その精巧さは驚くばかり。そのリアルさゆえ、ヒト型ロボットが実用化される日も近いのでは？と思わせます。

小沢裕子は日常生活やネットの中でみつけた映像や音などを用いて、ユーモアと思索にみちた作品を制作します。《語呂合わせ》はテレビにあふれる様々な人物の「語り」をつなぎ合わせ、そこに作者自らの口パク映像をつけた作品です。コミカルでありながらも様々な問いを投げかける作品です。

《米朝アンドロイド》は落語を演じることができますが(*)、声が発せられたとたん、桂米朝という人間の存在感や個性はぐっと強度を増します。しかし、小沢の作品では、口をパクパクしている人物は、個性や存在感は感じられず、むしろロボットのような雰囲気すら漂わせます。いずれも「声」を出して何かを「演じている」わけですが、「声」の使い方一つでその人物の印象が変わるといのは、実に興味深いことです。

このほかにも様々な「現実」が皆さんをお待ちしています。また「リアル」をテーマにした高松市美術館コレクション展も同時開催。ぜひお楽しみに！

[高松市美術館 牧野裕二]



石黒浩《米朝アンドロイド》2012年



小沢裕子《語呂合わせ》2005年

*6月7日《米朝アンドロイド》、桂米朝氏による「親子」落語競演を開催！詳しくはホームページ、チラシ参照。

Activities

[2013年] 4月～12月 civiの主な活動です。

6/22～8/24

シヴィ新メンバー養成講座(全6回)

研修

みなさん、はじめまして！今年度からciviの仲間入りをしました片山と申します。もともと美術館が好きだったのですが、偶然「ボランティアスタッフ募集」のチラシを見つけ、美術館の活動をサポートするという活動内容に興味を持ち、応募しました。豆本づくりのワークショップ、美術館の日のアシスタントは、参加者のみなさんと楽しく作品づくりができました。アニュアル展でのギャラリートークデビューは非常に緊張しましたが、それぞれの作品について深く知ることができておもしろかったです。これから、どうぞよろしくお願いたします！

[片山加奈]

4/6～5/19

特別展

「チェブラーシカとロシア・アニメーションの作家たち」
チェブラーシカといっしょに撮影しよう！

アシスタント

チェブラーシカといえば、オレンジの箱に入って送られてきたちっちゃな動物ですが、美術館に現われたのは、巨大な固い頭をもつ大きな姿でした。それでも、目の大きい愛らしい表情で、あの絵本のイメージそのままのかわいらしさ。撮影会に集まってくれたお客さんたちも、まずその大きさに驚き、それから、「チェブ！かわいい！！」と、何度も歓声が上がったものです。大阪からわざわざ来られた方達もいて、反響は大きく撮影会の様子がYouTubeにも投稿され、チェブを誘導する私も写っていたので、繰り返し見たものです。得難い楽しい体験をさせていただきました。

[石原ミエ子]



7/17～9/1(会期中毎日曜)

特別展「大竹伸朗展 憶速」

ギャラリートーク

2013年夏、大竹伸朗はベネチア・ビエンナーレと香川の3つの施設でプロジェクトを展開しましたが、そのうちの1つが高松市美術館で開催された「大竹伸朗展 憶速」です。油彩・水彩・写真・映像・立体など総数534点という膨大な数の作品が展示されましたが、その中で私がトークをするのに最も悩まれた作品が《ダブ平&ニューチャネル》でした。この作品は5m四方の巨大な小屋で、リードギター・ダブ平率いるノイズバンドのステージです。大竹の代表作であり自身の自画像だそうです。屋根や壁はトタン板が張り付けられ、内も外も大竹が集めた昭和の看板、ポスター、印刷物や物で埋め尽くされています。展示室の中でこの作品はあまりに大きく、そして圧倒されるほどの物量を前に一体どこから説明すればいいのか…。ステージでは昭和のカラオケが流れています。大竹は音までも拾い集めたのでしょうか。この作品をじっくり見たことで大竹伸朗の人物像に近づけたと思っています。

[三好ひさこ]

7/20～9/1

瀬戸内国際芸術祭2013

「海あかりプロジェクト」

参加

第2回瀬戸内国際芸術祭、夏会期の参加作品として、「海あかりプロジェクト」にciviとして参加しました。「海あかり」とは、青森のねぶたのような作品で、骨格は材木と針金で成形し、表面に一枚一枚真っ白な和紙を貼っていきます。制作期間は5月下旬から7月上旬。某カーディーラーのご好意で制作場所を提供いただきました。マーメイドが切り株の上に乗っている、大地の女神「ガイア」です。人を作るのは難しくてバランスを取るのに苦労しましたが、出来上がりはとても美人でグラマーなマーメイドになりました。リーダーの大澤さんの指示のもと、チーム一丸となって作ったガイアは、夏会期の幕開けの点灯式では、ひときわ美しく見えたのは、ひいき目だからでしょうか。

[横井真由美]



civi plus
《ガイア・みんなの応援天使》
2013年

4/14

子どものアトリエ「ぱらぱらアニメ制作！」

(講師:グラフィックデザイナー・横山俊一氏)

アシスタント

4/21

ワークショップ「マリオネット人形をつくろう！」

(講師:美術家・川崎展子氏)

アシスタント

5/1 しびの一と27号発行

5/17・18・19

「三木町高齢者教育学園」

アシスタント

三木町からの依頼により、5月17～19日の3日間、アートを使って楽しむ高齢者教室にスタッフとして参加しました。デカルコマニー・もみ紙・フロッタージュ・カードゲームなどのプログラムを楽しんでいただきました。デカルコマニーでは偶然できる形がおもしろくて、紙を開くときには歓声が上がったり、隣の人と批評し合ったり、フロッタージュでは室内を歩き回って材料になるものを探したりで、頭の体操になるとおっしゃる方もいました。両親とも亡くなっている私は、親孝行の真似事をさせていただいたようで、心温まる一日となりました。

[横井真由美]



もみ紙を楽しむ参加者のみなさん

10/26 ~ 12/1

(会期中、10/27を除く毎日曜・祝日)

特別展「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.03 DAYDREAMS / 夢のゆくえ」

ギャラリートーク

「DAYDREAMS/夢のゆくえ」をテーマに、5人の優れた若手作家を紹介する展覧会。お客様は最初に入り口で、超絶美女スプツニ子！の特大写真に目が釘付けになります。ポップなメロディーに合わせた映像を楽しみ、時折流れるカラスの声に思わず笑い声。テクノロジーを通して私たちに問題を投げかける彼女の「はみ出す力」にはみんな興味津々です。高松明日香による、浮遊感漂う不思議な絵画の次は、トーチカの映像作品「PIKAPIKA」。「これどうやって作ったんやろか?」と不思議がるお客様に、「実はペンライトの軌跡から作られた、光るアニメーションなのです」と種明かし。ニューヨークの古い劇場や映画館を描き続ける依田洋一朗の絵の中に、年配の方はチャップリンを、若い方はエマ・ワトソンを見つけます。昔あこ



高木正勝作品

がれだった他の名優を探し出して喜ぶ方の姿も見られます。おしまは椅子に腰かけていただいて高木正勝の映像と音楽にゆっくり浸っていただきました。今回の展覧会にお越し頂いた方々には、五感を通して、夢のようなひと時を過ごしていただけたのではないのでしょうか。 [福岡洋子]

10/26

ワークショップ「スプ子さんと作品鑑賞しよう！」

(講師：美術家・スプツニ子!氏)

アシスタント

アニュアル展初日を飾るスプツニ子！本人による自作を前にしての鑑賞とトークのワークショップ。小学生低学年の子供たちがちょこんとイスに座り、同じくイスに座ったスプ子さんと対話形式で始めました。カラスと会話ができる《カラスボット☆ジュニー》、月面に女性のハイヒールの足跡をつける《ムーンウォーク☆マシン、セレナの一步》、福島の除染作業に想を得た、歩むと菜の花の種が地中に埋め込まれる《菜の花ヒール》などの出品作品について熱く語るスプ子さんに、子供たちは目も心も奪われたようです。日英ハーフのスプツニ子！氏は人形のようにはっきりした顔立ちと、ピタピタの超ミニワンピースから伸びる長い脚の持ち主。映像作品に自ら主演しています。解説の合間に「東京より西に来たのは初めてよ。高松の名所ってどこ



なの?」と、子供たちに質問を。笑顔で栗林公園の話聞いていました。世界を相手に大活躍中のスプツニ子！氏の迫力に子供たちは圧倒されつつも、目線を合わせて一緒に過ごせた楽しいひと時だったと思います。 [堀本真弓]

10/27

ワークショップ「曲をつくる」

(講師：映像作家・音楽家・高木正勝氏)

アシスタント

前夜のピアノライブの興奮冷めやらぬ状態でのワークショップは、いつもとは一味違う異色のワークショップでした。「曲をつくる」というからには各々持ち寄った楽器で作曲をするのかと思いきや、象になったり、エアー赤ちゃんを抱っこして寝かしつけたり、チワワの気持ちを分析したり…イメージを膨らませて思いを込めれば、わずかに2~3個、究極たった一つの音でも、リズムや高さを変えて曲を作ることができるという事を、実際にして見せてくださり、音の魔術師、高木正勝さんの作曲の秘密に触れる貴重なワークショップでした。

[池田幸子]



9/7 ~ 10/14 (会期中毎日曜・祝日)

特別展「グランマ・モーゼスと近代絵画」

ギャラリートーク



絵を描くことが何よりも好き、彼女の生甲斐は絵を描くことと言ひ、75歳から筆を握り、101歳の誕生日まで絵筆を持ち続けました。良き母、そして優しいお婆さん画家はどんな作品を描いたのか興味津々でした。彼女はきれいな絵が一番好きといいます。展示室に入ると絵本のようなメルヘン的、幻想的な作品が広がっていました。米国の自然が広がる農村風景、明るい色と喜びに満ちた人物、素朴で暖かい作品が眼に飛び込んできました。これらの絵を見ている人の顔がだんだん優しくなっていくように思いました。「こんな絵なら私も描ける」と言われてたお客様の声を耳にしました。「それはチャンスですよ。きっとその気持ちがあなたにも生きがいを見つけれはるはずだから」と声をかけたくくなりました。トークをしながら私自身心が和み不思議な気持ちに包まれた日でした。 [皆見礼子]

9/15

子どものアトリエ「私の街・あなたの街・みんなの街」

(講師：陶芸家・倉石文雄氏)

アシスタント

「こんな街が、あったらいいな〜!」と思う、自分の理想の街を作ろう。ルールは1つ、各々の街がつながる様に道を付ける事。陶芸家・倉石文雄さんの指導を受け、子供達は、約20cm角の粘土板に思い思いの家やビルを建て、自分だけの小さな街を作りました。みんなの小さな街を持ち寄りどンドン道をつなげて行くと…子供達から歓声が上がりました。大きな街の出現です。「私達は、一人ではなく色々な人とつながって街が出来、生きている」というメッセージが込められています。 [山上紹代]



9/23

ワークショップ「名画模写にチャレンジ！」

(講師：美術家・杉本公和氏)

アシスタント

10/20

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

「大竹伸朗展 ニューニュー」見学

研修

香川で開催された大竹伸朗のプロジェクトの一つ、「大竹伸朗展 ニューニュー」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)は、「大竹伸朗の現在」に焦点を当てた展覧会。新作が中心とあって、私たちには必須の展覧会でしたので、10月20日(日)、同館のキュレーターズ・トークに合わせて出掛けました。私は《自画像としてのスクラップ小屋：モンシェリー》に注目しました。憶速展の《ダブ平&ニューチャンネル》のステージ小屋も大竹の自画像ですから、互いの作品の繋がりを探ってみることができました。高松、丸亀以外にも瀬戸内国際芸術祭・女木島で《女根》が展示されていて「大竹伸朗」に魅了された夏でした。

[三好ひさこ]

11/4

ワークショップ「映画の場面を描こう！」

(講師：画家・高松明日香氏)

アシスタント

映画やインターネットから集めた人物や風景を題材に、透明感あふれる世界を描く高松明日香さん。ワークショップでは紙芝居作りを通して、彼女の手法を参加者に教えてくれました。彼女が私たちに選んでくれた映画は、かの有名な「E.T.」。いくつかの名場面から各自が好きなシーンを選び、自分なりに描いて皆で一つの紙芝居を作ります。透明フィルムに書き写したり切り抜いたり、どんな手法を用いてもいいのです。多くの子供たちにとって「E.T.」はなじみの無い古い映画です。それでも子供たちは自分の選んだシーンを、大胆な色使いやアイデア一杯の手法を使って、どんどん作品に仕上げていきます。出来上がった紙芝居の発表会では、いろいろなシーンの個性的な表現を皆で楽しみました。明日香さんの作品は子供たちの柔らかい心から生み出された作品とどこか似ているなあ、と感じたワークショップでした。 [富岡洋子]



美術館ボランティアcivi(シヴィ)による
ギャラリートークは、
**特別展会期中の毎日曜日および祝日の
午前11時～、午後2時～の1日2回、
2階展示室にて行います。**

私たちと
鑑賞をご一緒
しませんか？

10/27

ワークショップ「立体ドローイングをつくらう！」

(講師：画家・依田洋一朗氏)

アシスタント

11/3

ワークショップ「PiKA PiKA でえがく夢の世界」

(講師：映像作家・トーチカ

[ナガノタケシ+モンノカズエ])

アシスタント

ペンライトで「私の夢の世界を描こう！」というワークショップです。映像作家トーチカのお二人の熱血指導で始まりました。1時間目：ペンライトのレッスン。丸や三角を描く事から始め、動物や乗り物も描けるようになり、車を少しずつずらして描き、光の軌跡をコマ撮りしてつなげると…車が動き出しアニメになりました。2時間目：夢の世界を描こう。各々の「私の夢」を絵にしました。ピアニスト、ケーキ屋さん、お姫様…。宇宙飛行士(ロケット、噴射、星)それぞれのパーツ



参加者作品(ピアニスト)

を描く人を決めて撮影です。テイク1、テイク2…、何度もやり直し、次第に息も合い、全員で力を合わせて夢の完成！！お疲れ様でした。皆の夢叶うといいね。

[山上紹代]

大竹伸朗展 憶速 2013年7月17日～9月1日

大竹伸朗、瀬戸内デルタ

*2013年7月29日四国新聞掲載記事を一部修正し再掲

OKUSOKU VELOCITY OF MEMORY 憶速

予讃線の西の終着駅・宇和島に、東京から居を移して今年で25年。きわめて多作かつ多才な美術家・大竹伸朗(1955-)はこの夏、高松、丸亀、女木島という、瀬戸内に面する三つの場所で時期を重ねて、個展と屋外プロジェクトを展開した。

美術は歴史的なものである。無数の個の足跡が保管・記述されアーカイブとなる。また一方で美術は非歴史的なものである。ある物質と感覚と時間が偶発的に出会うことによってしか発生しない。この一見相反する二面性を縦糸と横糸にして、とんでもない規模と繊細さでこの世界を捕えて作品とするのが、大竹の仕事である。

2012年にはドイツの国際展「ドクメンタ」に日本から唯一人選ばれ、翌年にはイタリアの「ヴェネチア・ビエンナーレ」に出品するなど、国際的評価はますます高まっている。しかし驚くべきは、「国際」と「宇和島」の遙かな距離を越えたという事実以上に、既成の「ルート」や「戦略」に依らず、手探りで「大竹伸朗」という立ち位置自体を作り続けていることだ。地方でも頑張れば世界で認められる、というのではない。「国際」「日本」「地方」というピラミッド的な価値体系をひとつたびゼロに戻し、ひたすら自分の感覚に耳を澄まし正直に反応すること。その孤独な作業の持続が突破口となる。それは芸術の希望である。絵画、立体、音、写真、映像、本、アウトプットは様々だが、大竹の作品はいつも世界と出会った感覚の喜びと驚きで満ちている。



大竹伸朗《ダブ平&ニューシャネル》1999年
公益財団法人 福武財団蔵 (撮影：福永一夫)



オープニング典後、《ダブ平&ニューシャネル》
ブースにて演奏を披露する大竹氏。

東の終着駅・高松ではスケッチブックなど多数の未発表作を含めた500点を超える回顧展(高松市美術館「憶速」2013年7/17～9/1)を開催。丸亀は大型の新作中心で、なぜか「宇和島駅」が出現している(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館「ニューニュー」2013年7/13～11/4)。女木の屋外展示では巨大なパイが立ち上がり、かつて見たこともない生命的光景が繰り広げられた(「女根／めこん」瀬戸内国際芸術祭会期)。

島育ちの人に言わせれば、陸から見えている海の景色は「裏側」なのだそう。瀬戸内という場の中で、裏と表、始まりと終わりは知らない間に反転し、美的価値の交換＝交歓が行われたのであった。

[高松市塩江美術館 毛利義嗣]



8月10日坂本龍一氏のコンサートに先駆けて行われた
坂本・大竹両氏の対談。

第2回

復活！わき役のひとりごと。

浮世絵の見返り美人のように豪華な着物を着た婦人がゴザの上で扇子片手に舞っています。彼女が手に持っている扇子の私が、本日の絵の案内人です。金の葉が刺繍された朱色の着物を着た婦人をよく見ると、髪が金髪で顔も日本人ではないのですね。そう、彼女の名はカミーユといいます。そして、ご主人の名前はクロード・モネです。

彼女は手に私を持ち手品師のように沢山の団扇を中空に散らしています。団扇一枚一枚よく見て下さい。浮世絵や日本画

が描かれているでしょう。モネは日本がたいそうお気に入りです。浮世絵をコレクションしていました。その影響でしょうね。

この絵が描かれた時のお話をしましょう。カミーユは金髪カツラを被り日本の着物を着ておどけ、少女のように無邪気に微笑んでいます。モネも楽しく笑いながら描いていました。そして扇子である私もフランスの国旗の三色で虹のように描いてもらいました。美しく描いてもらい嬉しかったものです。側にいる私もモネ夫妻と笑いのある幸せなひと時を過ごしました。ときどき当時のことを懐かしく想い出します。

[皆見礼子]

クロード・モネ《ラ・ジャポネーズ》1876年 ポストン美術館蔵



ニューヨーク・高松・メキシコ～それぞれの「旅」

2013年10月26日～12月1日に開催された特別展「高松コンテンポラリーアート・アニヴァールvol.03 DAYDREAMS / 夢のゆくえ」に参加していただいた2名の高松ゆかりのアーティスト高松明日香さんと依田洋一朗さん。高松さんは展覧会が始まって間もなくメキシコに行き滞在制作をされ、その成果は2月に帰国して間もなく高松市塩江美術館にて開催されたグループ展「今日を過ごす方法」にて発表されました。また高松さんには優れた新進作家に贈られる岡山県の「氏賞」大賞受賞という嬉しい出来事もありました。依田洋一朗さんは今回、生まれ故郷の高松に約1か月滞在し、展示立会い、関連イベント、展示室にお越しになる来客の案内などをして過ごされ、合間で作品制作もされました。ニューヨークに戻られてからも、横5m近くある大作を描くなど精力的な活動を続けておられます。今回、このお二人にそれぞれの「旅」の思い出をご寄稿いただきました。

[高松市美術館 牧野裕二]



グアダルーベ寺院へ向かう大通り

高松 明日香 グアダルーベの聖母たち

こんにちは、「高松コンテンポラリーアート・アニヴァール vol.03 DAYDREAMS / 夢のゆくえ」にてお世話になりました、高松です。今回は先日滞在してきましたメキシコの聖母について、感じたことをつづります。

メキシコは国民の約90%がキリスト教を信仰していて、16世紀にグアダルーベという場所に現れた褐色の肌を持つ聖母のことを、「グアダルーベの聖母」と呼んでいます。この聖母は国民から絶大な支持を受けていて、街中で祭られている姿を見ることができます。グアダルーベ寺院近辺へ行くと、ありとあらゆる「聖母グッズ」が売られており、聖母はTシャツにまでプリントされています。しかし、聖母の姿をさまざまな媒体にコピーし続け、数多くの「グアダルーベの聖母」が存在しているこの状況で、私は聖母が聖母と感じられなくなっていました。

そんな時、滞在先アパートの入り口に祭られている、グアダルーベの聖母と美しい生花を見ていると、ひとの心の中に聖母は確かにいるのだと実感することができました。メキシコに行かれた際は、ぜひ聖母の存在を感じてきてください。



高松明日香《CASA drawing》

依田 洋一朗 高松での滞在とその後

昨年、高松市美術館で開かれた「高松コンテンポラリーアート・アニヴァール vol.03 DAYDREAMS / 夢のゆくえ」に参加させていただいたことは、ぼくにとって素晴らしい出来事でした。楽しかったワークショップ、ボランティアの方が入場者に僕の作品について上手に解説されているのを聞いて感動したこと、急速することになったレクチャーなど、心に残っています。また、あつとき一緒だったアーティストのみなさんや木下智恵子さん、茂木健一郎さんも懐かしいです。

牧野さんをはじめみなさまのご協力でさせていただいたレジデンシーで描いた一点の「グレートギャツビー」は、ニューヨークにもどってから183×457.2cmの大作に発展しました。シアターペインティングも同時に進行させています。音楽の方では、1月29日にイーストヴィレッジのライブハウスでぼくのバンド、「ペン65000クラブ」の演奏があり、多に盛り上がりました。10月には東京で個展があり、帰国します。もちろん、高松にも帰ります。高松市美術館にお邪魔するのが楽しみです。See you soon!



依田洋一朗《Living Too Long With A Single Dream(The Great Gatsby)#2》2013年 油彩、カンヴァス



ライブ風景(中央が依田氏)

藤本由紀夫トーク

「ヨシダミノルについて」を聴いて

開催日 | 2014年1月26日[日]

2014年1月26日、高松市美術館1階講堂で、藤本由紀夫さんによる講演会が開催されました。

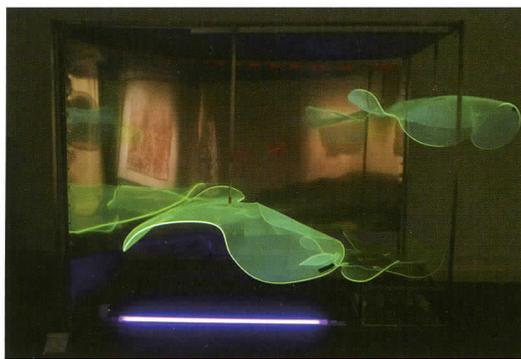
この日は、午後1時から大阪大学総合学術博物館招聘准教授 加藤瑞穂さんによる講演会「高松市美術館の「具体」コレクション」があり、その後、藤本由紀夫さんによる講演会「ヨシダミノルについて」が続くという充実のメニューでした。

藤本由紀夫さんは、大学在学中に知りあった友人のお兄さんが偶然ヨシダミノルさんであったことから、ヨシダさんのアトリエにお邪魔することになり、知り合います。講演会では、1970年頃に実際にお2人が会って話をしたときの様子や藤本さんの視点から眺めたヨシダさんの美術活動について、たくさんのユーモアを交えながら話されていました。

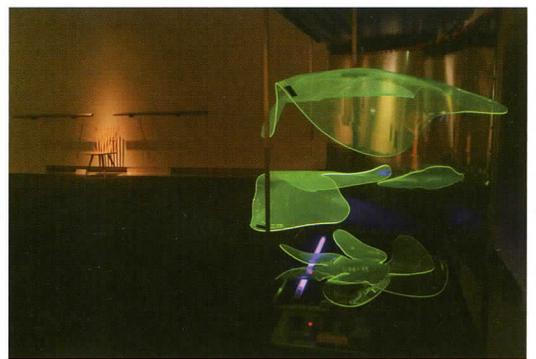
なかでもおかしかったのが、藤本さんがヨシダさんのアイデア帳(スケッチブック)を眺めていたときのこと。「今でもよく覚えているのはですね…」と淡々とした口調で1970年代当時の状況が話される藤本さん…「スケッチブックに大きく『直角が好き!』って書いてあったんですね。日本語で。それを見て、ああカッコイイなあ!と思いました。」会場で聞いていたときも思わず声を出して笑ってしまったのですが、その2ヵ月後の今、テープおこしをするために講演会のビデオを再生したときも耳にイヤホンをつっ込んだまま、また笑ってしまいました。

そしてつくづく、誰かが誰かを好きになるのは、こういう瞬間なんだろうなあと思ったのです。誰かのささいな何かに共感したり、参った!と思ったとき、その対象を大切にしたいという気持ちが生まれるんですね。この講演会は、そういう視点で見ると「藤本由紀夫はヨシダミノルのどこに参った!と思ったか。(好意を抱いたか)」の話だったように思います。講演会中、藤本さんの「ヨシダさん大好き!」という気持ちがひしひしと伝わってきました。

その後も当時のパフォーマンスを記録したビデオを映しながら、ヨシダミノルさんの活動が紹介されていきます。最も詳しく説明されていたのが、「シンセサイザージャケット」について。ヨシダミノルさんは、当時の新素材であったプラスチックをいち早く制作に取



ヨシダミノル《JUST CURVE '67 Cosmoplastic》1967年
高松市美術館蔵



2013年度5期常設展でのヨシダミノル作品(右)と藤本由紀夫
《EARS WITH CHAIR (on the wall)》1990 / 93年 高松市美術館蔵

り入れ、それで透明な「鎧」のようなものを作ります。そして、鎧に電子音楽を再生する機材と機材を動かすための何十個もの乾電池を取り付け、それを着こむ。そして、N.Y.ソーホー区の空を飛ばそうとするのです。しかも上半身裸で下半身は真っ白のタイツ。こうやって映像を文字に置き換えながらも、何から何まで訳が分からなくて笑ってしまいます。結局のところ、その怪しい見かけ故か警官に詰問され、ソーホーの上空を飛ぶことを断念。シンセサイザージャケットを着たまま通りを歩くこととなります。しかし、変な格好をしてノイズな電子音楽を流しながら歩く東洋人の周りにはあつという間に人だかり。ビデオからは、子どもたちがあどけない声で「Why?」「Why?」と言っているのが聞き取れます。

私は、最近になってやっと一見役に立ちそうにないことを実践することは、とても大切だと思えるようになりました。数年前、私は本を読む時間を惜しんだ時期がありました。働いて金銭を得ること、家事をして家族に奉仕すること、それらは結果が目に見えますが、私が本を読む時間はただ消費されて消えてしまう…だから無駄なことではないかと考えたのです。私はその知識をどこで活用するわけでもない。ただ同時に、自分の中には「読みたい」という衝動があります。無駄なはずのことをどうして私は求めるのだろうか?ということも悶々と考えた時期がありました。今は、この一見無駄なことの中にこそ、生きることそのものがあるのではないかと考えています。簡単に言うと「面白い!楽しい!」と思う瞬間=生きている瞬間であるということです。

美術家を前にして私がいつもスゴイなあと思えるのは、自分の心に従ったその勇氣です。プラスチックを手に入れるお金の無駄、シンセサイザージャケットを作り上げる時間の無駄、裸でノイズを鳴らすジャケットを着ることに目的を求めなかったこと(求めたんですかね?)、…それを恐れずに「こうしたいなあ」という気持ちに従った勇氣。ヨシダミノルさんの作り上げた無駄の総体は、藤本由紀夫さんをはじめとするたくさんの人に愛されて、40年経った今もこうやって誰かを楽しませています。それはとても素敵な連鎖だなと思います。

さて、藤本由紀夫さんとヨシダミノルさんに「参った!」の愛を抱く当館学芸員 牧野氏の命を受け、私は引き続き講演会のテープおこしに挑みます。「貴重な資料になりますから、よろしく。」と言われ、一言一句聞き逃さないようにと耳を澄ませるのですが…いやあ、難しいですねえ。愛の連鎖を断ち切らないように頑張ります! [高松市美術館 福田千恵]

編集後記

◎「エチオピアを訪れた時に歌って迎えてくれた子ども達の映像を逆再生すると、歌に合わせてたたいてくれた手がパツと花が開く様に見える」という高木正勝さんの話が印象的で、その映像と共にずっと心に残っています。[池田幸子]

◎スプツニ子!に魅せられた私。ムーンウォーク☆マシンの実物が見たくて東京都現代美術館の「うさぎスマッシュ展」までダッシュで行ってきました。ああ満足!! [冨岡洋子]

◎大竹伸朗展では、作品にも本人のキャラクターにもハマりました。いつか宇和島のアトリエを見たいものです。アニュアル展もサイコー!でした。[堀本真弓]

◎二か所の美術館でグランマ・モーゼスの作品を見ました。作品を所有している損保ジャパン美術館では本家ならではの、落ち着いて心を和ませる感じ、高松市美術館では作品の多さで明るく生きいきとした感じでした。展示の仕方や、場所により作品は表情を変えるのですね。[皆見礼子]

◎「憶速」最終日、大竹さん自身が重たいリズム、轟音ギターが売りのノイズバンド<タブ平&ニューチャンネル>を遠隔操作で演奏しました。音にも圧倒されました。[三好ひさこ]

◎ハウステンボスで1000万球のイルミネーションを体験。まさに「光のアート」。光り物好き(?)の私には、ああ夢が幻か…。ちよっぴりエネルギー問題も気になりながら…。[山上紹代]

◎2014年の春は、シヴィのみなさんと活動を共にする機会が増え、とても刺激的でした!!「しびの一と」にもお邪魔します~。[高松市美術館 福田千恵]

◎2014年3月22日「四国こどもとおとなの医療センター」にシヴィのみなさんと訪れ、森合音(あいね)さん、森かおりさんに丁寧に案内していただき、アートが人と人、心と心をつなぐ媒介として活躍していることに感激!そして、また訪れたいなる病院ですごい、と思いました。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]